
ぱんださんようちえん

道造

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぱんださんようちえん

【Nコード】

N5026BA

【作者名】

道造

【あらすじ】

KANONのギャグ。

タイトル元ネタは某同人音楽から。

「犬猫熊って、熊の仲間だから人間襲うよな」

そんな事を言っていた北川が、昨日辻斬りにあった。

「ぐおおおおおおおおお」

「……危険な話題をするからだ」

背中から袈裟斬り。

空気の切り裂く音もさせずに一線。

そして鐸鳴りの音すらさせず、剣を鞘へと収めた後。
辻斬りは消えたらしい。

「凄い腕のいい辻斬りだな」

「俺、あの人見覚えあるんですけどねえーっ！」

ミミズのように頭をのたうちながら、北川は絶叫する。
口調がどごそのヘタレになってるぞ、お前。

「お前がパンダ人食うなんていうからだろ」

「それでイキナリ辻斬りはないだろ！」

うん、ないな。

でもそれが俺の日常。

「手加減してくれたんじゃないのか。あれ研ぎ甘いから切れ味悪いけど、重いから骨折や器官破裂ぐらいは簡単だぞ」

「お前真剣使う時点でおかしいと思わないのか」

……。

だから、そんな事を毎日考えていても次第に。

「慣れた」

「ごめん」

真顔で語る俺に、北川は何故か悲しそうな顔で謝った。

一枚皮に過ぎなかったのか、痛みこそ地獄に近いものの北川は真っ直ぐ背を立て、椅子に座っている。

「まあ、そのうちお前も避けられるようになるぞ」

「いや、ごめん。悪かったからそこに至る経過を想像させないでくれ」

何故か北川は頭を深く深く下げながら、「ごっつん」と机にぶつけて止まった。

俺もこくり、とそれに合わせるようにして首を下に向ける。

さて、ここで俺と北川が考えなければならぬ事は何か。
すでに、これは茶飲み話ではすまない。
明確になっている。危機に対する対策が必要なのだ。

「と、いうわけでここは一つ危機管理について話題にしたいと思う」
「物凄く理解しがたい上に、嫌な展開ね」

香里は物凄く嫌な表情で、俺たち二人を見た。

「ここは香里に下知を仰ぎたいのだが。何かいい方法はないだろうか」

「答えたくないけど、進行上、仕方なく答えてあげるわ……」

香里は疲れた表情で、ため息をつく。

「ところで、北川君は？」

「彼は死んだ」

実際には、傷口が少し開いたので保健室に言ったただけだが。
香里はその言葉を流し、そう、とだけ呟いた。
どうでもいらいしい。

「しかし、二人で会話というのも寂しいな」

俺は呟き、隣を見た。

「だおー」

名雪は今日も寝ている。

机に横頬を押し付け、まったりと窓により収束された太陽の光を楽しんでいた。

俺はその寝顔があんまり愛らしくて、手で後髪を撫でた。

「せいっ、はっ!」

轟沈。

俺の手により、名雪は春の季節を感じる。

「殴ってるじゃないっ!」

「いや、コイツはこれぐらいししないと起きないから」

俺の角度45度から空手チョップにより、何故か苦悶の表情で眠りに耽る名雪の顔を見た。

少々やりすぎたか、と頬つぺたがくつつくまで顔を近づけ、耳元で囁く。

「オレンジ色のジャム」

苦悶の表情が、絶望へと変わった。

「これで、目覚めるはずだ」

「悪魔ね」

非難罵倒が俺に降り注ぐが、まあそんな日もあるっ。

だが、一応弁解はしておく。

「人が雪に埋もれてる時に、『ドクター中松の頭茶』を渡してくる奴の方が酷いぞ」

「そんなもの、どこに売ってたの」

俺がああ寒さと、何混ぜたのコレ、という嫌な味を思い出す横で。

香里は名雪の苦悶に満ちた寝顔を見る。

「名雪……相沢君を、愛しているのね。この地域じゃ、そんなもの売ってないのにわざわざ……」

「……」

香里の微笑みは酷く理解し難いが、まあ秀才とは常にそういうものだと思ふ事にした。

「うーん、何？」

その視線に答えたのか、名雪は目をこすらせながら起きる。

「何か、頭痛い。悪い夢を見た気もするよ」

「気のせいだ」

俺は腕組みをしながら答え、香里に向き直る。

「ともあれ、どうしたらいいか質問してるんだ」

「うーん、そうねえ……」

率直に、香里は返答する。

「話し合いは？」

「不可」

「別れるのは？」

「嫌」

とりあえず出された提案に、二文字で返す。

香里は提案に大した期待を抱いていなかったのか、続いて言葉を放つていく。

「一度、どこか遠くにでも逃げたらどう？」

「うーん」

三つ目の、やる気なさげな質問に唸る。

逃げる、という提案はともかく、距離を置く事自体は悪くないかもしれない。

「しかし、逃げてどうするんだよ」

「えーと、昔から古典で言う話じゃあ……」

香里は目を天井に向けながら、口元を手で押さえた。
なんとなく、その仕草が可愛いと感じながら、俺は黙って言葉を聴く。

「醜女 顔だけでなく、性格や挙動の意味もあるけど。そういう女性におっかけられた男は」

舞は可愛いぞ。ただ可愛すぎて辻斬り癖があるだけだ。

と言おうと思ったが、よく考えると論理式的に狂った台詞なので止めた。

「逃げて逃げて」

タカタカタカ、と香里は指で机の上を弾き、音を出す。
その指は机の端まで走っていき、ひゅー、という口笛とともに机の
下に落ちていった。

「海に身を投げて自殺」

「ちょっと待て」

俺は言葉を止めた。

「え」

「え、じゃなくて。なぜ死ぬ」

「人間は疲れたら、結構あっさり死ぬものよ」

わかり易い回答だ。

柔死んでた場合のコイツを考えるに至り、説得力があつて背筋が薄
ら寒くなる。

「お前、死ぬなよ」

「死ぬ理由がないわよ」

香里は真顔で呟き、俺の顔を見る。

ただ、多少口元は綻んでいたのを確認し、全ては冗談だと受け取る。

「ともかく。私にそんな事聞かれても、こんな馬鹿な返答しかする
気はないわよ」

「何でだよ」

「質問が馬鹿だからよ。そんなケースの危機管理なんかマトモに考
える気になれないわよ」

ああ、そうだね。

と、俺は心から納得した。

「……というより、私に聞く前から結論は出ているんでしょう？」
「ああ」

俺は椅子から立ち上がり、握りこぶしを作って宣戦する。

「舞と闘う」

頑張りなさいな、と香里はどうでもよさそうな視線を送った後。

立会人ぐらいはしてあげるわ、と呟き、立ち上がる。

俺も同様に椅子から立ち上がり、彼女が待つ屋上へと向かう。

「私は何のために起こされたの？」

名雪の不満そうな声が耳に残るが、それは幻聴として忘却することにした。

「と、いうわけで戦いに来たぞ、舞！」

「うむ、女性相手に二人がかりだ、祐一！」

北川の心強い呼びかけに、俺は笑顔で答えた。

屋上で待っていた舞は、いつもの朴訥な声で呟く。

「……別にいいけど」

「すでにボロボロだしね」

舞と香里は、むしろ気遣わしそうな表情で俺と北川を見る。

北川は痛そうに背筋を曲げており、俺は少しばかりの打ち身の痣が全身にあるという矛盾した重傷。

「……昨日斬ったのはともかく、何で祐一まで？」

「うむ、名雪にプラスチックバットで殴打されてな」

あの野郎、まだ恨んでやがったのか。

と心の中で吐き捨て、さすがにやりすぎたか、と自分でも思う。

「誠意をこめて謝ったら許してくれたから、そっちの方は大丈夫だ
！」

「そう。よかった」

ほっ、とため息をつくようにして、舞は胸元を押さえて表情を緩めた。

心から心配してくれたのだろう。

いじらしくて抱きしめたくなるが、その前に『俺の事斬るな』という不文律を立ち上げる方が先だ。

と、俺は思い直す。

「川澄さん。この相沢の件でわかったように、全ては心から謝れば済む事。」

だから、川澄さんにも誠意をこめて謝って欲しい！ さむなくば闘うまで！ でも出来れば勘弁！！」

北川は、いきなり逃げの手を打った。

いや、このまま闘っても確実に負けるので仕方がないが。

「…………じゃあ、闘う」
「闘うの!？」

普通、謝らないか。

という表情を北川はしたが、彼女に理論は通じない。
きつと、まだ犬猫熊を人食い呼ばわりした北川の事を恨んでいる。

「嘘はついていないじゃないか! パンダは人喰うって絶対! マ
ジ!」
「…………」

ずっ、と摺り足の音が鳴ったか、と耳が感じた瞬間。
眼前に、一線の光が走った。

「うおおおおおおおおおおおお」

悲鳴。

斬られ役をもう何十年もこなしてきたぜ といった風情で
北川はゆっくりと足を崩し、前のめりに倒れた。

「 峰打ち、安心して」

ソイツを斬った太刀を見切れたか、とでも聞くように、舞は俺に言
葉を投げかけた。

その剣、両刃にみえるんだが。
とは、口に出さないでおく。

「…………それで、祐一はどうするの? ぱんださんは人食べない」
「俺はどうればいいんだ。個人的にぱんださんは人を喰うと」
「知らないわよ。ていうか、何でそんなにパンダさん人食説にアン

夕達はこだわるのよ」

ぱんださんは人食べない。

それよりも、横の女の人誰？ とでも言うように舞は俺にプレッシャーをかけてくる。

俺はぜっていパンダは人喰うって、と横の香里に呼びかけるが、つれなく振られた。

中国では毎年、何千何万もの大陸人がパンダさんの胃の中に

「あ」

俺は香里に、ぱんださんがどれだけ怖いか伝えようと思ったが香里はふと、何かを思い出したように、少し小走りに屋上扉へと向かう。

そして扉に立てかけてあったものを、こちらに放り投げてきた。

「プラスチックバット。名雪が返しといてって」

「いや、剣相手にこれは無理だと思っぞ」

だいたい、コレは相手に怪我をさせずに力いっぱい殴れるところがポイントであって。

殺傷能力は欠片も無い。

「……まあ、いいさ」

何も 殺し合いがしたいわけじゃない。

ただ、俺は舞に理解してもらいたいだけだ。

「背番号1、相沢祐一がバッターボックスに立ちました」

パンダさんは、人を喰うって。

「そういう目的だったかしら」

俺の心を読んだような香里のツッコミが入るが、無視。
ただ今は無心に、プラスチックバットを揺らす。

「今日の相沢選手、調子が悪いです。名雪選手と乱闘したせいでしょうか」

わかりあおう、舞。

パンダさんは犬と猫と熊の構成物質。

犬さんと猫さんは、わんわんとにゃーにゃー。

でも熊さんの仲間だから、ぱんだぱんだと人を喰う。
そういう生き物。

「ああ、何で私は相沢君の考えてる事がわかるのかしら」

「 祐一、その女は何」

香里は空を仰ぎ、何かぼやいていた。

舞はそれを聞いて、何故か不愉快そうに剣を向ける。

「落ち着いて、マウンド上の川澄を睨みつけます」

俺は剣の代わりにバットを向け、宣戦する。

舞の顔色はぎすぎすとした色となり、ますます不快へと変わっていった。

「対するはピッチャー川澄。背筋を綺麗に伸ばし、顎を引いており
ます」

「答えて。自分の世界に引きこもらないで祐一」

舞は香里を睨みつけ、貴女は祐一の何なの、と小さく呟いた。香里は本人に聞いてみないとわかんないわよ、という表情でそれに応じた。

「答えて、祐一。その女、誰」

「マウンド上の川澄、焦りが見えます」

「……そう、答えない。なら、仕方ない」

俺はバッターボックスで身体を大きく捻り、ボールを大空へと運ぶ用意をする。

野球 それは素晴らしいスポーツだ。

俺は舞と野球でわかりあいたい、そう考え、戦闘を拒否する事にした。

きっと、舞もそうするはず。

「さあ、ボールを投げて来い、舞！」

お前の全てをこめてこい。

そして、スポーツで理解しあうんだ。

ピッチャーの舞、振りかぶって。

一瞬で間を詰め、剣を振り下ろして俺を斬った。

「……おかしーなー」
「おかしいのは、相沢君の脳みそじゃないの？」
「うん」
「うん、じゃないわよ」

俺は正直に答えたのだが、香里はますますもって脳味噌の容量を疑うかのような目つきをする。
手に握るプラスチックバットは、真芯から先がなくなっていた。
新しいのを調達しなければならぬ。

「昨今の野球は激しいスポーツだ」
「まだ野球やってたつもりなの」

最近、外でも野球の話題って聞かないよなあ。
そう祐一は呟きながら、野球というスポーツが縮小してしまった事を悲しむ。

香里と一緒に帰り道の夕焼けは、赤かった。

「……」
「……何でアタシがこんな馬鹿に肩を貸さなきゃいけないのかしら」
「優しくしてくれ」
「してあげてるわよ」

不機嫌そうに揺さぶった肩の振動が、俺の身体へと伝わって傷に響く。

ああ、いつもは皮一枚なのに、今日は随分と深く斬られたものだ。

「ああ、相沢君。一つ言っておきたいんだけど」

「何だ」

「おそらく、相沢君が斬られるのって、大方自業自得だと思うわ」

「……そうなのか？」

「そうよ」

香里はおそらく、と言っておきながら、断言した口調で言う。

はあ、と吐いたため息が、俺の耳に大きく聞こえた。

「香里」

「何？」

「迷惑かけて、すまん」

「いいわよ、別に」

香里はまた肩をすくめた。

傷に響いて、また痛むが。喘ぎは口に出すまい。

「お詫びとっては何だが、いいことを教えよう」

「そう」

ただ会話を続け、舞にはわかってもらえなかった事を、香里へと伝える。

「パンダさんは人喰うからな。覚えとけよ」

「はいはい」

香里はあきれたような表情で返し、応諾を二回繰り返す。

「笹の葉が分布している場所には気をつけるよ」

「日本にパンダさんはいないわよ」

香里は驚愕の事実を俺に伝えた。

「いや、それぐらい知ってなさいよ」

さらに何故か、かわいそうな目つきで俺を見た。

俺は香里から下知されたこの情報を、世間に広めようと誓う。

「明日、俺は真琴のバイト先の保育園に行つて、この真実を幼児達に広めに行こうと思う」

「やめなさいな」

子供が、日本にパンダさんいるって信じてたっていいじゃない。

あと、人食いとか言うな。

そう香里は思い、先程出会った上級生の少女の事を考えた。

「つまり 私の方が、大人の女って事ね」

「ん、どうした香里」

「何でもないわよ」

香里はぐい、と俺の肩を自分の方によせ、余裕の表情を浮かべた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5026ba/>

ぱんださんようちえん

2012年1月14日23時53分発行